

こうしたなか、何香凝は1924年1月、広州で開催された国民党第1回全国代表大会席上で、「法律上、経済上、教育上、社会上の男女平等の原則を確認し、女性の権利の発展を図ること」を提案し、採択を受けている。孫文死去(1925)の直後、夫の廖仲愷が右派により暗殺されるが、26年の第2回大会では、宋慶齡(孫文未亡人)、鄧穎超とともに何香凝は3名連記で「婦女運動決議案」を提出。これは1949年に至るまで、国民党、共産党の婦女運動の共同方針となる——というのが、現在の中国共産党の公式見解。27年には、蒋介石政権の一切の職を辞し、英仏に遊学して画業に勤しむが、31年にパリより帰国、上海で「時局に関する意見」を発表し、以降「抗日運動・故国救亡に奔走」することとなる。

家族が国民党右派の迫害に晒され、蒋介石と決裂したことが、中華人民共和国成立以降の何香凝の栄達に貢献したことは疑えまい。

成瀬仁蔵と何香凝・下

徳は孤ならず、  
必ず隣あり

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授

稲賀繁美

中国国民党革命委員会副主席、國務院華僑事務委員会主席、全国婦女連合会名誉主席を歴任した老女は周恩来の庇護の下、1972年、文化大革命下の北京に病没する。後には『何香凝詩画集』が遺された。

「徳は孤ならず、必ず隣あり」とは成瀬仁蔵の言葉だった。その国境を越える業績を顕彰するためにも、もっとも傑出した中国の隣人のひとりとして、何香凝の名は記憶されてしかるべきだろう。と同時に、何香凝らの掲げた「婦女運動決議案」に結実する女権論は、どこまで成瀬のキリスト教思想(晩年には汎宗教の傾向を強める)に負い、どこからマルクス・レーニン主義の論理に則ったものなのか。マスコミ受けする「著名人の恩人」美談を越えて、歴史的経緯を勘案し、詳細な批判的検討を加えて行く必要が、今後の思想史の課題として残る。

\*参照：尚明軒・余炎光(編)『双清文集』人民出版社1985 なお陳教授はさらに詳細な論考を準備中。